

国際 ICT 利用研究学会 論文誌

Journal of International ICT Application Research Society

JIIARS

2025 年 第 7 卷 第 1 号

March 2025 Vol.7 No.1

1

目次

巻頭言

- chatGPT と初期平安京正方形仮説
国際 ICT 利用研究学会 理事 高見 友幸（大阪電気通信大学） 1

論文

- スマートフォンなどから見る小・中学生の情報倫理意識
ー埼玉県 A 町の事例報告ー
白木洋平（立正大学 データサイエンス学部） 3
- 縄文時代の後期から晩期にかけての人口減少に関する一考察
～現代や他の文化との比較～
次郎丸 沢（株式会社 OME） 12
- 弱条件組合せ線形計画法とメタ組合せへの応用
稲田 禎一（IHÉM），高橋 里司（電気通信大学），
松尾 徳朗（産業技術大学院大学） 19
- 学生の声アンケートが浮かび上がらせる大学運営の課題
西川 友子（山形県立米沢女子短期大学 社会情報学科），
川村 麻耶（山形県公立大学法人 事務局） 23
- 東北地方の短期大学生の地域活動への参加動向と居住年数の影響
加藤 さらさ，西川 友子（山形県立米沢女子短期大学） 29

編集後記

- 国際 ICT 利用研究学会 副会長 田中 敏幸（慶應義塾大学） 39

chatGPT と初期平安京正方形仮説

国際 ICT 利用研究会
理事 高見 友幸

私の周辺での個人的な感触にすぎないが、2年ほど前から生成 AI が急速に進化して、職務上でも、プログラミングのサポートや文章の校正作業はもう完全に実用となっている。今年度の担当科目では、chatGPT を授業中に利用することで、これまでの授業では想像もできなかった講義が実現した。簡単な課題の場合、まずは chatGPT に聞いてみようというのが私の授業スタイル。その後で chatGPT が出せなかった解答例を示して、どうや、人間の方がまだ上やなあと何か何とか言うのがいつものパターンである。正解のソースコードに加え、ソースコードの解説もしてくれるが、これはプログラミング分野に限ったことではなく、歴史学や哲学の質問、法律の相談、物理学や数学の質問に対しても同じである。自分の専門か専門外かを問わず、文系理系の区分も問わず、



生成 AI を使えば、大学初年次レベルぐらいの講義であれば、何でも講義できそうな万能感を感じてしまう。もはや私はどんな科目でも講義することができる！??。。。

ともあれ、生成 AI はさらに急速な発展を見るのであろう。とすれば、国際 ICT 利用研究会は今後かなり賑わうのではないか。言語モデル／翻訳が原点にある生成 AI は、当然ながら、国際（グローバル）であるし、これまで各研究分野で計算機的ツールとして使われてきた ICT は、生成 AI 「利用」の方法論という切り口で最前線に出てきたように見える。その利用範囲は学術の全分野と言ってよい。分野を問わず多彩な研究者諸氏が集まってくることを期待したい。

たとえば、日本書紀の紀年論の研究に生成 AI を利用することができる。いまだ仮説の段階ではあるが、私見では、日本書紀はジグソーパズルとして設計されているように見える。そこで、chatGPT に聞いてみた。「紀年論の研究についておうかがいしたいのですが、紀年論である程度の成果が得られた先行事例はあるのでしょうか」残念ながら、私の論文は

ピックアップされていない。次に、本稿のタイトルに入れた正方形仮説のことを聞いてみた。「初期平安京の領域は正方形だったとする説があるのですが、この説に関連する論文を教えてください」ピックアップされた4つの論文はすべて私の論文だった。たぶん、これは国際 ICT 利用研究会のおかげであって、学会の論文誌に掲載された論文や研究会で発表した論文は、J-STAGE のデータベースに登録されるようである。chatGPT の検索はそのデータベースを頼りにしているらしい。

さて、本稿、生成 AI 賛美の文章ではあるが、CPU がまだ非力だった頃、生成 AI がなかった時代も、それはそれで、貴重で美しい時代だったなど感じている。センチメンタリズムなのかも知れないが、CPU 制御が日常生活に浸透していなかった頃がなつかしい。聞けば一瞬でわかってしまう、一瞬で片付いてしまう、一瞬で伝わってしまうことが、本当に幸せなのかどうか。眠れない夜、本を読み、長い手紙を書いて・・・というリルケの詩のような時代はもうなくなったということなのである。できれば、昔のように時間はゆっくり流れてほしいと思う。早くなくていいから。寝台列車から青函連絡船に乗り換えて北海道に行くというすばらしい時代がかつてはあったのである。

略 歴

1956年 大阪府生まれ

1985年 駿台予備学校 物理科 講師

1992年 京都大学大学院工学研究科電子工学専攻 博士課程修了 博士（工学）

1997年 大阪電気通信大学 短期大学部 電子情報学科 助教授

2012年 大阪電気通信大学 総合情報学部 デジタルゲーム学科 教授

現在の専門は、大型将棋史、日本古代史、Python プログラミング学

編集後記

最近では、医工連携による研究は当たり前のように行われていて、特に議論の余地はなくなっています。連携の際に何が難しく、どこに限界があるかなども知られるようになりました。私が関わっている他の学会では、医工連携の次に行うこととして文理融合ということが議論されています。なぜ、文理融合がうまく進んでいかないのかについてはいろいろな意見があります。

文理融合を語る前に、まず現在の学問体系はどのようにしてできたのかを考えていく必要があります。そもそも学問は、世の中の諸々の問題を解決するためにできたもので、最初は哲学だけでした。哲学を極めて、問題を解決する専門家と認められた人は「哲学博士」と呼ばれました。しかし、哲学だけで諸問題を解決するには無理があるため、それぞれの問題を単純化して解いていこうという発想が起きました。その時、数式を使って解いていこうとしたグループ、現象を比較して解いていこうとしたグループなどができ、それぞれが現在の数学や物理学などの体系になっています。その名残として、海外では数学や物理学などの分野にかかわらず博士の学位は、哲学博士の略語である「Ph.D (Doctor of Philosophy)」とされています。

もともとは哲学を単純化するために行われたことでしたが、それぞれの分野のレベルが高くなり、非常に際立った成果を上げたことによって、逆に分野を融合することが難しくなりました。医学と工学の場合には、比較的方向性が似ていたため連携は容易だったのですが、文系分野と理工学の方を融合させることは極めて難しい問題となりました。文理融合のためには今の学問体系をいちど壊してから組みなおす必要があるのではないかという意見もあります。文理融合はこれからの学門のキーワードになっていくと思います。

本学会は ICT をキーワードとして、多くの分野で活躍できる研究者を育てることを目的としています。学会に参加している方々はいろいろな分野の専門家です。ICT という縛りはありますが、この学会が行っていることは文理融合の第一歩と言ってよいでしょう。研究会での発表や論文誌に掲載されている成果が、皆様の今後の研究の一助となれば幸いです。

国際 ICT 利用研究学会 副会長

慶應義塾大学 理工学部 教授 田中敏幸

国際 ICT 利用研究学会論文誌 第7巻 第1号

Journal of International ICT Application Research Vol. 7 No.1

2025年3月31日 発行

発行者 国際 ICT 利用研究学会論文誌編集委員長 山下倫範

表紙デザイン 内藤慶恵

印刷 株式会社カンファレンスサービス

問合せ先 office@iiiar.org